

編集後記

明けましておめでとうございます。

今年も皆様にとって良き年でありますよう編集委員、編集局一同を代表して心からお祈り申し上げます。

巻頭言の村上氏のべるように、時の流れに本質的節目はないとはいえ、新しい60年代という時代の第一号となると、感慨も新たなものがあります。

そこで、当然60年代の展望ということになりますが、幸いにもこの点については巻頭言に村上氏が的確な論をのべておられます。しかし、敢えて追加させて頂くならば、今後の大きな課題の一つである“地域リハビリテーション”の確立のために、地域の医師をどのように取り込んでいくかということも、リハ・サイドに課せられた大きな目標ではないでしょうか。

本号は新年号にふさわしく、リハビリテーション医学の新しい課題である神経心理学を特集とし、新たに講座が2本、さらに一頁講座も義肢のパーツがはじまりました。

特集で取りあげた神経心理学は、すでにアメリカではリハ医学の分野に積極的に取り込まれ、脳障害のリハビリテーションに新しい境地を開きつつあります。幸いにも本特集のいずれの論文も、わが国のリハ医学の領域に

対する刺激剤として十分な役割を果し得るに足るものばかりだと思います。積極的にチャレンジしようではありませんか。

次に本号では、講座、一頁講座のいずれもが新しくなりました。講座は全身管理という大変基本的な問題ですが、これこそリハ医のIdentityを問われる重要な問題でもあります。本講座は試験に合格した若手(?)のリハ専門医の方々が執筆します。御期待下さい。

もう一つの講座は、欧米に比し最も遅れているのではないかとと思われる性についてであります。神経心理学と同様に刺激剤の役割を果せば幸いです。一頁講座は義肢のパーツです。新しい製品が続々と生れる昨今、皆様方の知識の整理に役立つことと思います。

本号はさらに、日本とアメリカの小児切断の第一人者の対談を掲載することができました。また、Setoguchi氏の特別講演を含む小児切断をテーマとした関東地方リハ医懇話会の特別例会の抄録集も併せて御覧下さい。

最後にICREを紹介して下さいた田中氏らに、このように日本には余り知られていない重要でレベルの高い学会の存在を教えて頂いたことに感謝したいと思います。

(大川 嗣雄)

編集顧問

天 兄 民 和
大 島 良 雄
河 邨 文一郎
五 味 重 春
砂 原 茂 一
津 山 直 一
土 屋 弘 吉

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
緒 方 甫
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
岩 倉 博 光
江口 壽 榮 夫
小 川 孟
茨 島 秀 男
奥 川 幸 子
加 倉 井 周 一
小 島 蓉 子
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
澤 村 誠 志
高 橋 勇
高 松 鶴 吉
武 智 秀 夫
土 屋 和 夫
土 肥 豊
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
長 谷 川 恒 雄
初 山 泰 弘
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
矢 谷 令 子
米 本 恭 三
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)

次号予告 (第13巻 第2号)

特 集 姿勢調節

立位姿勢の調節機構……………名大・環境医学研 渡 辺 悟
運動失調における姿勢調節……………奈良医大・神経内科 真 野 行 生
脳卒中後片麻痺の姿勢調節……………産業医大 森 田 秀 明・他
脳性麻痺の姿勢調節—身体動揺と足部微調節—浜松療護園 月 村 泰 治
脊椎側彎症の姿勢調節……………高知医大・整形外科 山 本 博 司

巻 頭 言 身体障害者福祉法とリハビリテーション……………弓張病院 稗 田 正 虎
研究と報告 変形性股関節症の動的立位平衡能……………名大・理療部 伊藤不二夫・他

症 例 報 告 気管切開患者のコミュニケーションおよび喉頭
機能訓練：発声用気管カニューレを使用した
三症例の経験……………中央鉄道病院 鴨 下 博

講 座 リハ医に必要な全身管理 2：高血圧……………産業医大 浅 山 晃・他
リハ医学と性の問題 2：脊髄障害と
性の問題……………神奈川リハセンター 石 堂 哲 郎
一 頁 講 座 義肢のパーツ 2：膝継手の分類……………兵庫リハセンター 中 川 昭 夫